

編集後記

毎年、春学期のあいだ講義の合間に、私はゼミナールの学生一人ひとりと会話する時間をもつようにしている。現在、四五名の学生が集まるゼミナールでは、演習を行う教室以外に、個別に学生との面談の機会を設けないと、卒業論文の審査のときまで一度も話したことがなかったというような人もできそうな一抹の不安を感じるからである。わずかな時間の話し合いであるが、新しい三年生の性格と興味や関心を把握し、四年生の卒業論文と就職活動の進捗状況をおぼろげに知るためには、一セメスターの期間を要する。個別指導の理想を唱えるのであれば、個別指導を実践しやすい環境をもつと整備しなければならない。もともと、このような問題を演習について考えるのも不可思議ではある。

学生がもちかける相談のなかの一定数は、大学院や専門学校への進学など、卒業後の進路に関する希望や悩みでしめられる。とくに学部水準の教育内容に満足できず、専門知識をさらに深めたいと大学院での勉学を希望する人は、小数ながらいつもあらわれる。最初の卒業生だったFさんは大阪へ、翌年にはK君が東京、Yさんが大阪へそれぞれ移って行ったが、生活や学習の環境、指導法の違いなどにより困惑した様子である。

大学の大衆化が叫ばれるなかで、大学教育にたいする学生の期待も多様化しているといわれるが、多様な期待のなかには、より高度な最新の専門知識や技術を求める欲求もふくまれるだろう。学部教育が平準化するほど、知識欲が旺盛な受講者は退屈な気

分になりがちなので、大学教育への満たされない思いはますます高まるだろう。学生への個別指導を徹底すると、大学院への進学希望者が、思いがけずたくさん掘り起こされるかもしれない。

彼らは学部教育がつまらなかつたから進学するのか、反対に、学部教育がおもしろかつたからなのかは明らかではないが、それを調べた結果は、学部教育と大学院教育とが一貫して体系化されたカリキュラムを考案するひとつの参考資料となるだろう。大学院を設置しているかぎりは、小数であっても大学院での勉学に期待する学生に應える環境を整える義務があると思う。(KTA)

平成十年七月十五日 印刷
平成十年七月二十日 発行

(非売品)

編者 愛知大学文学会

代表者 奥村敏

印刷所 豊橋市小池町
東邦印刷工業所

発行所

豊橋市町畑町
愛知大学文学会
振替〇〇八三〇一―四五六四